〈巻頭言〉

「エズラ・ヴォーゲルアジア学」

―［特集］第 2 回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラムに寄せて―

李　春利
愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）所長

ICCS 機関誌である『ICCS 現代中国学ジャーナル』（電子定期刊行物）は、2024 年 6 月に発行した第 17 巻第 1 号に、第 1 回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来」と題した特集を組んだ。それに続き、今回の第 17 巻第 2 号は、第 2 回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」と題した新しい特集を発行することになり、誠に喜ばしいかぎりである。

第 2 回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」

2024 年 7 月 6 日、愛知大学名古屋キャンパスにて第 2 回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」が会場とオンラインのハイブリッド形式で開催された。記念フォーラムでは、

ヴォーゲル先生と 40 年以上の長い交流関係にあった國分良成先生、リチャード・ダイク先生、李廷江先生、さらに、次世代研究者として幅広く活躍しておられる江藤名保子先生をゲストスピーカーにお迎えした。各先生方はそれぞれのお立場と専門分野からヴォーゲル先生を偲びながら、いわゆる「エズラ・ヴォーゲルアジア学」を検証し、如何に継承して発展させるべきかについて、興味深い議論を展開した。ご講演いただいた内容は以下のとおりである。

<記念講演>　國分良成（慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長）
　「歴史的視点から見た日米中関係の現在―ヴォーゲル先生に敬意を込めて―」
<基調講演>　リチャード・ダイク（ハーバード大学アジアセンター顧問）
　「半導体産業をめぐる米中日競争のフロンティア」
<パネラースピーチ>　李廷江（清華大学日本研究センター所長、中央大学教授）
　「エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界―個人史の視点を中心に―」
<パネラースピーチ>　江藤名保子（学習院大学教授）
　「日本における中国研究―展開と課題―」

今回のフォーラムは、昨年度の第 1 回に引き続いて、中日新聞社に共催のご協力、また、愛知大学教育研究支援財団ならびに愛知大学同窓会に後援をいただいています。この場をお借りして、ご支援とご高配に厚く御礼申し上げます。

「エズラ・ヴォーゲルアジア学」

「エズラ・ヴォーゲルアジア学」という表現は、國分良成先生が記念講演の中で提起された興味深いコンセプトである。ご講演の冒頭に「現代中国研究の現状と課題―ヴォーゲル・アジア学からの啓示」と題して、アジア研究が「タコ壺化」しはじめ、それぞれの研究が「壺」にはまってミクロ研究に終始するという傾向があると指摘された。その意味で、エズラ・ヴォーゲル先生の研究は興味深く、ヴォーゲル先生は珍しく日本研究から入ってきた中国研究者であった。なお、先生は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』や『現代中国の父　鄧小平』など日中両国でベストセラーになったご著書を出版され、東アジア諸国では学界を超えて広く親しまれる存在になった。ここまで幅広くできる研究者は、エズラ・ヴォーゲル先生の前にも、後にも続いていないと、國分先生はヴォーゲル研究の特色を高く評価している（本誌参照）。

振り返ってみると、エズラ・ヴォーゲル先生は 1958 年から 2020 年に亡くなられるまで 60 年間の長きにわたり、激動のアジアの成長と変化を見守り続けてこられた。この間、日本の戦後復興と高度成長、昭和から平成を経て令和に至る日本の社会・経済の変貌、それから韓国、台湾、香港、シンガポールといったいわゆる「アジア四小龍」の台頭と勃興、さらには毛沢東時代と鄧小平時代の中国、改革開放から高度成長への全過程に及んだいわゆる「中国の実験」など、東アジア地域全体におけるダイナミックな変化を、ヴォーゲル先生は現地と現場でつぶさに観察しつづけ、研究してこられた。

一つの試論として、そのような徹底した現場主義を方法論的な基礎とし、時代の潮流に身を置きながらその要請に応えていく「研究の同時代性（contemporaneity）」と、既存のディシプリンの枠組みを超えて対象地域を「まるごと」捉える「研究の総体性（holistic approach）」を併せ持つヴォーゲル流のアジア研究を、ここでは「エズラ・ヴォーゲルアジア学」と呼ぶことにしたい。

ここの「ホリスティック・アプローチ」は、元々医療用語であり、その基本的な考え方は、「全体は部分の単なる総和ではなく、部分間の相互作用によって新たな性質が生まれる」というところにある。つまり、個々の要素を単独で見るのではなく、それらが相互に影響し合うことで生まれる全体的な特性に注目する。例えば、多様性に富んだアジア地域の複雑な現実問題を分析し解決するためには、単一の学問分野だけでなく、複数の分野の知見を統合した学際的なアプローチが求められている。[1] その意味において、「エズラ・ヴォーゲルアジア学」はまさにこのような総体性を重視する「ホリスティック・アプローチ」の典型例ともいえる。

ヴォーゲル先生の研究方法に関しては、ハーバード大学アジアセンター顧問で、ヴォーゲル先生のご指導の下で最初にハーバード大学の博士号を取得されたリチャード・ダイク（Richard Dyck）先生は、2021 年の文章の中でとても興味深いご指摘があった。すなわち、

> “Vogel always fought to have area studies represented in the disciplines such as economics, political science, sociology, and anthropology at Harvard University. His point was that theory should be in the service of understanding the ‘area’, rather than the ‘area’ in the service of proving theory.”
>
> （ヴォーゲルは、ハーバード大学の経済学、政治学、社会学、人類学といった学問分野に地域研究を取り入れるよう、常に闘ってきた。彼の主張は、理論を証明するために“地域”があるのではなく、“地域”を理解するために理論があるべきだということだ。）[2]

今日の中国学研究やアジア学研究が直面している諸課題を考える際に、「エズラ・ヴォーゲルアジア学」が我々には多くの示唆と啓発を与えることに違いない。

松下幸之助とエズラ・ヴォーゲル対談

ヴォーゲル先生のご遺族から愛知大学に寄贈された約 3100 冊の本の中に、興味深いものが発見された。85 歳の松下幸之助氏が私財 70 億円を投じて設立したばかりの松下政経塾に、エズラ・ヴォーゲル先生が招かれて講義し、さらに、松下幸之助氏と対談を行った。その講演録と対談録が収録された 1 冊があった。

---

[1] フレームワーク・ライブラリ「ホリスティック・アプローチとは」https://techsuite.biz/22037/ 2024 年 12 月 15 日アクセス。

時は 1980 年、当時はちょうど日米貿易摩擦の真最中でした。その前年の 1979 年にヴォーゲル先生の代表作『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が出版され、日本語版だけでも累計 70 万部が売れた一大ベストセラーとなった。その時、ヴォーゲル先生が松下幸之助氏との対談の中で述べられた言葉が、私の印象に強く残っている。

「日本はわれわれの競争相手ではありますが、競争相手を必ずしも敵にする必要はないのです。」[3]

約 40 年後の 2019 年に、ヴォーゲル先生が愛知大学の「中国公開講座」で講演された時も、主語が変わったというだけで、また同じことをおっしゃっていた。

「中国はわれわれの競争相手ではありますが、競争相手を必ずしも敵にする必要はないのです。」[4]

この言葉は、ICCS が出版した『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業―永遠の隣人―』という本の中にも収録されている。この本は、ヴォーゲル先生が急逝された翌年の 2021 年 8 月に、先生の講演録やその解説文などを収録した形で「ICCS 特別記念出版」として出版されたものである。

1980 年当時の中国は、改革開放政策が始まったばかりで、この年に深圳をはじめとする 4 つの「経済特区」が設立されたのである。40 年の歳月が経ち、片方の米国は変わっていないが、貿易摩擦の相手は日本から中国に変わり、「日米貿易摩擦」も「米中貿易戦争」へと「昇格」したのである。そして、2018 年に米中貿易戦争を仕掛けたロナルド・トランプ元大統領は、2024 年の大統領選挙を圧勝し、2025 年 1 月に再び米国大統領の座に返り咲くことになったのである。「タリフマン」（tariff man）と自称しているトランプ氏の再登板は、世界規模での関税合戦のエスカレートを予感させずにはいられない。

中国の諺に、「三十年河東、三十年河西」という言葉があり、「三十年は川の東、三十年は川の西」と訳されている。これは中国の古典『儒林外史』（清朝・呉敬梓著）に由来する故事で、「昔、黄河はよく川筋が変わるので、元々河の東側にあった土地が数十年後には河の西側になっていた」という意味である。世の中の盛衰は常に移ろい易いことの喩えとなっている。

アメリカの激変を受けて、漂流する米中関係、そして停滞する日中関係は一体どこへ向かうのだろうか。混沌とした昨今の世界は、不確実性が高まるばかりである。

第 3 回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」へ

---

[2] Richard Dyck, “Ezra Vogel: 1930–2020”, East Asia Forum, Asian voice, January 12, 2021
[3] 松下政経塾 （著）『松下政経塾講話録 Part 4』、PHP 研究所、1981 年。
[4] エズラ・F・ヴォーゲル、李春利著『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業―永遠の隣人―』（Ezra F. Vogel and Chunli Li, *The Last Lecture: Ezra Vogel on China and Japan*、あるむ、2021 年。

とはいえ、アメリカでは変わらないものもあった。エズラ・ヴォーゲル先生が一貫してフレンドリーな目線で東アジア諸国の成長と変化を見守り続けてこられた。その真摯な姿勢に励まされて、愛知大学は 2025 年夏に、「ヴォーゲル・ファミリー」というふうに我々は呼んでいるが、すなわち、エズラ・ヴォーゲル夫人のシャーロット・アイケルズ先生（Charlotte Ikels, Case Western Reserve University 名誉教授）と、ご令息のスティーヴン・ヴォーゲル先生（Steven K. Vogel、カリフォルニア大学バークレー校政治学部教授）のお二人をお招きして、この名古屋キャンパスで今年と同じように第 3 回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」を開催する予定である。これまでご関心とご支援をいただいてきた皆さまには、ぜひ引き続きご注目とご協力を心からお願い申し上げます。

最後に、ヴォーゲルフォーラムの共催者として閉会のご挨拶を賜った中日新聞社取締役・名古屋本社代表の鈴木孝昌さま、それから本特集の原稿の校正の労を執っていただいた曽根英秋博士には心から深く感謝の意を表したい。学内外の関係者やスタッフたちの力を総結集したおかげで、この記念すべき「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」の開催および 2 回にわたる特集の発行がはじめて可能になったのである。主催者の ICCS を代表して、各方面の皆様の多大なご協力とご支援に対して心より厚く御礼を申し上げる次第である。